



2016.11.27

NO.8

伝道に燃える教団

日本基督教団

伝道推進室

今こそ、福音伝道の前進のために！

suisinsitsu

News

contents 2/夏期研修会報告 3/各地伝道応援報告 4~5/特別寄稿 6~7/宗教改革500周年記念事業経過報告 8/お知らせ

「伝道の力」

マルコによる福音書 第6章 6~13節

錦ヶ丘教会牧師 川島 直道

九州教区・熊本地区長

それから、イエスは付近の村を巡り歩いてお教えになった。そして、十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。その際、汚れた霊に対する権能を授け、旅には杖一本のほか何も持たず、パンも、袋も、また帯の中に金も持たず、ただ履物は履くように、そして「下着は二枚着てはならない」と命じられた。

マルコによる福音書 6: 6~9

今年はオリンピックがありました（皆さんには遠い昔のことのように思われるでしょうけれども、ちょうどこの原稿を書いているのが8月末でオリンピックが終わった頃でしたのでお許しください）。日本人も活躍しました。その中で改めて気づかされたのは個人の力というよりも団体、チームの力です。男子400メートルリレーの決勝ではおもわず声をあげてしまいました。個人では決勝に進むことができない選手たちがリレーでは決勝に残り、なんと銀メダルを取ってしまうのです。他のどの国も日本のバトンパスの技術の高さを賞賛していました。日本チームは多くの時間を割いてパスの練習をしたそうです。個々人の力は小さくても、チームで戦うときにその強さを発揮する。体操も卓球も団体は良い成績を残しました。

伝道もやはり個々人の力というよりは団体、チームの力です。「二人ずつ組にして遣わすことにされた」（7節）。主イエスは弟子たちを伝道に派遣されるときに一人ではなく「組」で遣わされました。個人の力で



Mikotoba

はなく、共に協力すること、チームでの働きが重視されます。一人一人の力は弱いけれども共に歩む仲間がいる。そのことが伝道を推し進めます。

この度の熊本地震では多くのご支援、ご協力をいただきました。一つの教会ではこのような危機は決して乗り越えられないでしょう。この時ほど教会のつながりの強さを感じたことはありません。まだ行政の支援が届く前、交通事情も悪い中、いち早く水や食料を届けてくださいました。毎日のように全国から励ましのお手紙や寄せ書きが届けられました。避難されていた地域の方々はこのような教会の迅速な対応力や協力関係の強さに驚いていました。まさに教会のチーム力が発揮された時だったと思います。

その一方で何も持たないことがこの御言葉では強調されます。それは持つことによってわたしたちは自己完結してしまうからです。あるいは持つこと、所有することで協力すること、分かち合う教会本来の交わりを忘れてしまうのです。これは各個教会主義の問題性を示しています。自分たちだけで成り立つと考える。自己完結、自己充足が教会の健全さを失わせます。むしろ持たないことで他者の存在に目を向けることができるのです。そしてそこでは一つのパンを分かち合う、キリストの体の交わりという教会の本来の在り方を思い起こさせるでしょう。

なぜ二人一組なのか。それは単に仲間と一緒にいて心強いということではなく、この弱く小さなわたしに同伴してくださる真の同伴者を覚えるためです。

やがてクリスマスを迎えます。わたしたちと共に歩まれるために神は愛する独り子を与えられました。この福音こそわたしたちの本当の伝道の力なのです。

教師継続教育・夏期研修会

「教会一主の教会を建てる」



プログラム

8月9日(火)

12:30 受付 13:00 開会礼拝 説教:小島誠志(久万教会)
 14:30 講演1「日本基督教団という教会の公同性について」講師:近藤勝彦(前 東京神学大学学長)
 16:30 講演2「教会の公同性をめぐって①」講師:神代真砂実(東京神学大学教授)
 19:00 「牧会夜話」～北陸の伝道を振り返って～ 大隅啓三(隠退教師) 20:00 夜の礼拝 説教:小島誠志

8月10日(水)

9:30 朝の礼拝 説教:小島誠志
 10:30 講演3「教会の公同性をめぐって②」講師:神代真砂実(東京神学大学教授)
 13:00 講演4「教会的説教」講師:小泉 健(東京神学大学准教授)
 14:30 講演5「ホーリネス教会の教会形成の特色」講師:潮 義男(仙台青葉荘教会) 16:30 座談会「教師の人事(就任と辞任)」
 19:00 「牧会夜話」～弱さの中で働く神の力～ 軽込 昇(隠退教師) 20:00 夜の礼拝 説教:山田京二(隠退教師)

8月11日(木)

9:30 朝の礼拝 説教:山田京二 10:30 講演6「牧師の言動が相手を生かすための行動定着法」
 11:30 開会礼拝 説教:山田京二 講師:永谷研一(株式会社ネットマン代表取締役社長)

教師継続教育「第7回夏期研修会」報告

曲がり角の先に見えるもの

スタッフ/沼津教会牧師 宮本 義弘

今から10年前、東京の高井戸教会を会場にして日本伝道会が主催する「Cコースの会」が初めて開催されました。この研修会は、当時教団総幹事であった内藤留幸先生の肝いりで、いわゆる「Cコース」出身(教師検定規則第三条6に該当し、教団の認める神学校を経ずして、3年間18科目の試験に合格して教師となった者)の教師の研修と交わりの場として発足したものでしたが、3回開催したところで一時頓挫してしまいました。しかし翌々年、Cコース出身者と教団の教師になって准允後5年までの者たちの交流と研修と霊性の回復を目的として「夏期研修会」という名称で再出発しました。そして3年前より伝道推進室がこれを継承しました。

今年度、伝道推進室は、準備の段階から教団教師委員会と連携し、名称にも「教師継続教育」を加えて、8月9日～11日、日本聖書神学校のご厚意により会場を提供していただいていたことができました。教師委員会との連携というのは、本来、教師養成ならびに継続教育は教師委員会の務めだからです。

この10年間、「Cコースの会」「夏期研修会」にはほとんど欠かさず出席されている一人の教師がおられます。Cコースで教師となられましたが、10年前は、教師となっても任地がないという状況でした。任地は、出身神学校、教区、教団教師委員会などが紹介していますが、そのような伝手がCコース出身の方にはほと

んどないというのが現状です。結局、この研修会を通しても人事の紹介はできませんでしたが、教会に仕えることが許されました。しかし、教師に働き場所が与えられただけでは、その務めを全うすることはできません。全く未知な世界に孤軍奮闘せざるを得ないのが新任教師の現実です。教会形成、説教、牧会、特に、葬儀などについてだれにも相談できずに悩むことも多くあります。

この方は、経済的に小さな教会に仕えているために、この研修会には京都から夜行バスに乗り、宿舎もスタッフの格安ホテルに同宿するという形で経費を切り詰めて参加を続けています。しかし、そのことが幸いして、同宿のホテルで夜毎に語り合うことができ、そこから伝道への新しい力を得て、教会に戻って行かれることを繰り返してきました。これが継続教育の本当の姿だと思います。

今年の夏期研修会は「教会一主の教会を建てる」と題して、「公同教会」についての学びを中心に行いました。その研修会全体の様子は、CD(全11枚)に収録されているので、参加されなかった方も聞いていただきたいと願いますが、毎年、伝道者としての学びを続け、そこで、新たな刺激と力を得て、教会に仕えていく教師たちを見送っていくことがこの研修会の裏方としては幸いなことであり、これからはそれが恒久的な教団の働きになることを予感しています。

CDは2千円で販売中です。
 ご希望の方は、伝道推進室
 (TEL03-3202-0541)まで。



各地伝道応援

◆沖縄教区◆

講師派遣

2016年6月19日(日)

石田 真一郎

(伝道推進室担当幹事・東久留米教会)



高原教会 特別伝道礼拝 「伝道の喜び」

高原教会牧師 高多 新



伝道者の働きは「種まき」に譬えられます。先日(6月19日)に、伝道推進室より、種をまく人、石田真一郎牧師(東久留米教会)が遣わ

されて、私ども高原教会において御言葉の種が豊かにまかれたことを心から感謝いたします。

ところで沖縄では、毎年6月23日を「慰霊の日」として大切に守っております。その日に近いこの主日に、「キリストによる平和」と題して語られた説教は、聴き手の心の中に深く浸み込んでいったことと信じます。

礼拝後に行われた愛餐会の時のことです。ひとりの求道中のご婦人が、突然私にうれしそうにこう言われました。「わたし洗礼を受けたい」。本当に驚きました。まかれた種がすぐに芽を出したのです。収穫の主は、種をまく人、まかれた人の喜びを味わわせるために、収穫の幻をはっきりと描かせてくださったのだと思います。

まかれた種が着実に育ち、実を結ぶことができますように、どうぞお祈りください。

◆東京教区 東支区◆

講師派遣

2016年6月26日(日)

小島 誠志

(元 教団総会議長・久万教会)



曳舟教会 特別伝道礼拝「たまものとしての命」 「伝道礼拝に参加して」

曳舟教会員 川村 二四郎



伝道は、私たちクリスチャンにとっては、主からの命令であり使命です。曳舟教会は無牧だった時や様々な困難がありました。そんな時

に上田光正牧師が赴任してくださり、ようやく伝道の体制が整った所です。

この異国の地は特にキリスト教には無知で誤解や偏見が強く、なかなか受け入れてくれません。そんな土地柄ですが、そのような地で伝道することは、失われた子羊を見つけ出すように、神に喜ばれる幸いを思います。

私たちは、一タラントに満たない者ですが、教会員一同が力を出し合ってゆくことで大きな力になってゆくことでしょう。自分は駄目だと思わず、神から戴いた大切なタラントを土に埋めることをせず、互いに励まし合い、伝道を推進してゆくことが大切だと思います。私たちは、イエスという樹に繋がれたブドウの枝です。その枝を、伝道することにより、より大きく強く成長してゆきましょう。

伝道応援報告

伝道推進室は、教団内諸教会に対する伝道応援として、伝道礼拝・伝道集会等へ講師を派遣しています。

《2016年7月～2016年12月》 ◆派遣教会 日時 講師

◆西中国教区 安来教会 チャペルコンサート 2016年10月25日 木村真紀(横浜菊名教会員)・大野智子(隠岐教会員)

◆関東教区 北関東キャラバン 2016年11月19日～21日 石橋秀雄室長他教職6名、

栃木地区5教会、群馬地区3教会

神学生8名参加予定

懇談会・説教奉仕・講演会・幼稚園での子ども集会

◆中部教区 魚津教会 クリスマス伝道礼拝・集会 2016年12月11日 石橋秀雄(伝道推進室長・越谷教会)

◆西東京教区 青梅教会 クリスマス伝道礼拝 2016年12月18日 北 紀吉(伝道推進室委員・松沢教会)

これからの 青年伝道

特別寄稿

若者と生きる教会 —失敗に付き合う大人たち—



K G K／キリスト者学生会総主事 大嶋 重徳

若者が教会にいらなくなったと言われて久しい。しかし、彼らに最も関心のある宗教はと問うとキリスト教がトップに来る。以前、私がした調査〈『若者と生きる教会』（教文館）〉では、6割強の若者がキリスト教に関心を持っている。それではなぜ、彼らは教会を訪れないのだろうか。

現代の若者の多くはチラシやポスターだけによる伝道集会の案内には無関心で、知人の居ない教会を訪れてみようとは考えない。しかし自分の友人が信じているものには少なからず興味を持っている。この場合、友情が深ければ深いほど、キリスト教に対する抵抗感は無くなる。未信者の若者が教会に行く機会となった出来事の上位に来るのは、「教会学校の経験」「親がクリスチャンになったから」「友人に誘われて」である。

ここで大切なことは、クリスチャンの若者が自分の友人を教会に誘おうと思うかどうかである。しかし教会に誘った自分の親友が、教会という空間に居心地の悪さを感じ、礼拝中に退屈そうな顔をしているのを見る時、彼らは心を痛め、さらに「教会はもういいや」と親友から断りの言葉を聞いた時、クリスチャンの若者達は深い失望感を覚えるのだ。それでも伝道しようと促された時、けなげに彼らは考える。彼が二度と教会に来なくても自分達が傷つかない程度の知人だけを誘うようになるのだ。私は彼らがこういうのを聞いたことがある。「大切な友人ほど誘いにくいのが教会だ…」。

先ほど挙げた調査で「キリスト教会に求めるものは何か」という質問を未信者の若者にしたところ、上位に来たのは「自由に使用できる居心地のよい場所の提供」と「若者向けのイベント」であった。これに対して、クリスチャンの若者は「若者に届く説教」「若者を励まし、支えていてくれる存在」を教会に求めている。クリスチャンの若者は1回限りのイベントではなく、彼らの抱えている問題に耳を傾け、真剣にキリストを喜び、自分の言葉でキリストを分かち合ってくれる、そんな大人のクリスチャンに教会で会いたいと願っているのだ。

では我々はどのようにクリスチャンの若者と関わればよいのか。私は「若者」と「教会」に一つの平行

関係があると思う。「若者」がさまざまな葛藤と失敗を経て大人として成長していくように、キリストの体なる「教会」もまた終末の完成に至るまで大人になる事は無い。この意味で、教会もまた地上では青年期を送っている。もし教会が自らを既に完成した教会であるかのように自己認識しているのであれば、それは自らで何でもやっていけるような若者たちの高慢な態度と同じだ。しかし教会は、絶えず傍らで深いうめきと忍耐を持って執り成し、かしらなるキリストを指し示し続けてこられた聖霊なる神によって、今日に至るまで成長してくることが出来た。教会が如何に罪深くとも、聖霊は教会を諦めずただキリストを指し示しつづき、その多様性をも認め、教会の失敗に付き合ってきたのだ。

では若者の側で執り成し、祈り、失敗に付き合い、キリストを指し示しつづけるのは誰か？ それは言うまでも無く、説教と聖礼典によりキリストを差し出すことのできるキリストの教会である。そしてかつて若者として青年期を過ごした同じキリストの体に連なる大人たちである。私たち大人が、若者の失敗に付き合っていくことが大切だ。教会こそ、失敗しても許される場所であり、何でもやり直すことのできる場所だという経験を彼らにしてもらいたい。まさにそれは私達が青年であった時に、多くの先輩達にさせてもらったことだったのではないだろうか。もちろん青年達が教会のなかで失敗を繰り返す時、私たちは、教会の歴史と伝統を乱されるような感覚に陥る。しかしその時にこそ教会が教会たらしめるものは何かという問いが与えられるのだ。青年達の発する問いによって、教会の中で当たり前だとしてきた物事の中に隠れていた人間的なものが露にされていくことが起こる。そして時代を超えて、決して譲ってはならないキリストの教会の本質を私たちは受け止め直し、それを若者たちに「届く言葉」で語り継いでいく機会となるのだ。教会が若者と共に生きることを選んでいく時、教会は真に健全な聖霊なる教会に導かれる教会となる。若者宣教は私達を健全な自己認識に戻してくれる教会の業なのであり、若者への宣教は、私達が終末に耐えうる真の教会となるための、聖霊なる神の介入を待ち望む業なのである。

愛のわざに励む

社会福祉法人 小羊学園理事長・
第 39 教団総会期常議員／遠州栄光教会員 稲松 義人



今年の夏、神奈川県にある障害者支援施設で、外部からの侵入者によって入所者が多数殺傷されるという事件が起きた。この事件の容疑者は、施設の元職員で、施設の内情をよく知っており、特に障がいの重い人たちを標的にしたとのことである。障がいのある人たちの命の意味を見出せず、数ヶ月前に施設を退職することになり、その後も障がいの重い人たちは安楽死させるのがよいという主張をしていたのだという。この容疑者の考えは一般の人たちには理解しがたく、「自分の勝手な思い込み」によって、特に「抵抗できない弱い人たち」の命を奪った行為に多くの人が激しい怒りを覚えたことだろう。この容疑者の行為やそのような行動の根拠となった彼の考えは決してゆるされるものではないが、なぜ彼がこのような行為に及んでしまったのか、彼の心の中を想像しつつあれこれと思い巡らしてしまうのは、私の職業からくる性癖なのかも知れない。

私は長年重い知的障がいのある人たちの支援をする中で、心身の重い障がいに併せて「行動障がい」と言われる周囲の人たちには理解しがたい行動をする何人もの人たちと出会い、彼らの行動の意味とその背後に隠されている彼らの心理について思い巡らしてきた。

今回の事件を受けて私が開いた聖書は、創世記 4 章のカインとアベルの物語であった。カインは、自分の捧げものに神が目留めてくださらなかったことを怒り、弟アベルを殺害してしまう。カインは、御心を受け容れることができず、神との関係に確信がもてず「不安」に陥った。カインはこの不安から、神と向き合うことができず、弟アベルへその矛先を向ける。その後神の呼びかけにより、カインは取り返しのつかない罪を犯したことを自覚する。そして神は、カインの命を取り去るのではなく、「さすらい者」とされる。旧約聖書は、その後イスラエルの民が、神との関係を求めて生きる民となったことを伝えている。礼拝を大切に、律法に忠実であることにこだわり、預言者の言葉を受け入れようとした。しかし、歴史に翻弄され、さすらいの民となり、囚われた民となり、救いを求める民となった。

イスラエル民族に限らず、世界の歴史は、「自分勝手な思い込み」によって、多くの「抵抗できない弱い人たち」の命を奪ってきた歴史でもある。そして今もなお、世界のあちこちで悲惨な殺戮の歴史が繰り返されている。人類はなにゆえ悲惨な戦争を繰り返すのだろうか。彼らもまた、自分あるいは自分たちと神の関係、言い換えると、自分が命を与えられた意味を問い

続けているのではないだろうか。

そのような世界に、主イエスは「神は我々とともにおられる」というメッセージとともに降誕された。イエスは「小さい者が一人でも滅びることは、天の父の御心ではない」と教え、貧しく弱い私たち一人ひとりを捜し求めてくださった。そして命をかけて失われた羊を捜してくださった。貧しく弱い者と同じ人生を生きてくださった。果たしてイエスは十字架につけられる。しかし、それは復活によって神との関係を確認可能なものとして示し、私たちが「神の愛」によって生きるためであった。私たちは、主イエスの十字架と復活によって神との新しい関係に生かされた神の民となり、「恵みによって召されたる者の集い」である教会に連なっている。私たちはそれぞれ、イエス・キリストに出会い、神との確かな関係の中に生かされていることを示された者である。私たちは、神の愛を知らされ、主の恵みを受けているからこそ、その喜びに押し出され、キリストの教えに従って愛のわざに励みつつ生きる者でありたい。

福祉の仕事をしていると言うと、ときどき、まるでそれが「愛のわざに励む」具体的な姿であるかのように言われる教会の人たちに出会う。昔の社会福祉事業は経済的に不安定で、また、偏見の中で生きる人たちに寄り添うことで一緒に迫害されることもあった。聖霊による助けを確認しなければ、自分を保つことができなかった。だからこそ先達たちは熱心に祈り求めた。しかし今は、社会福祉の仕事も職業の一つとして、卒業後の進路、あるいは転職先という職業選択によって働けるようになった。

人は、愛のわざに励んでいるから救われるのではない。ましてや、社会福祉の仕事をしていると救われるのでは決してない。むしろ、社会福祉の現場で、困難な境遇の中で生きる人たちと出会い、命を分かち合うとき、そこで彼らとともにおられるキリストに出会うことはしばしばである。（ひょっとすると福祉の現場は、神の愛のホットスポットではないかと感じる。スマホの代わりに聖書を片手に探しに出かけるところとしてはお勧めかも知れない。）

恵みにより召され日本基督教団に連なっている誰もが、「行ってあなたも同じようにしなさい」（ルカによる福音書 10 章 37 節）という勧めを受けとめてくださり、小さい者が一人でも滅びることのないように捜し求め、隣人に寄り添うなら、そこに「愛のわざに励む」生き方があるのではないだろうか。

2017 宗教改革 500 年

日本伝道 158 年



信徒会は 2016 年 4 月 16 日（土）、年次総会に併せて講演会を開催した。講演は、東京信徒会名誉顧問阿久戸光晴先生をお願いして、「世

界宣教の最終段階・現代日本宣教—宗教改革 500 年を憶えて—」と題して、関東周辺の信徒に呼びかけた。この講演には、さまざまな主題につながる内容が込められていて、その講演だけでは収まらないことになり、続いて 7 月 9 日（土）、まるで連続講演のように「ルターの『神の義』の発見—宗教改革の原動力としての『詩編講義』の変遷—」と題して講演会を開いた。

500 年前、ルターは「聖書に書かれていないことを認めるわけにはいかない。私はここに立っている。それ以上のことはできない。神よ、助けたまえ。」と述べたとされる。ルターが自我との葛藤の末に示された神の愛の姿。神の恵みの力を深く理解し、畏れと感謝をもって受け止めるという信仰によってのみ、そのことを追体験することが、ルターが、天国で一番喜ばれる 500 年の守り方ではないか…。

私たちは、「神」が動きを起して力強く働いてくださることを確信して、証ししていこう。

東京信徒会プロジェクトチームは、伝道 150 年大会を思い出しながら、第 3 回の委員会でいくつかのアイディア候補を列举した。これを教団 500 年委員会に報告、現在、同委員会の回答を待つ段階にある。回答を受け次第、実行プランに移っていく手筈にある。その一方では、宗教改革 500 年記念は、なにも東京ばかりでなく全国各地で行われることが望ましいと言い広めたい。全国信徒会として、信徒の力を集めて行きたいと願っている。聖書に押し出されて主体的に行動を起こす群れが各地に起こると信じて、ルターを追体験していこう。

2009 年、東京山手教会を会場に行われた「日本伝道 150 年記念信徒大会」



「我ここに立つ」 聖書の福音に立って共に進もう

第 39 教団総会期常議員／日白教会員
鈴木 功男

日本基督教団宗教改革 500 周年記念礼拝は、来年 2017 年 6 月 22 日（木）富士見町教会で行われることが決まった。

*

教団宗教改革 500 周年事業準備委員会から東京信徒会に対し、記念礼拝開催への協力依頼状とともに第 8 回同委員会への陪席要請があったことから始まる。

もともと東京信徒会の中では、既に宗教改革 500 年に際して、この記念の年をどのような態度で迎えるか話し合いをしていたところでもあり、教団同委員会からの委託を受けることにした。

東京信徒会では、早速プロジェクトチームを編成して協議を始めた。チームの誰からも口をついて出るのは、2009 年東京信徒会が委託されて「日本伝道 150 年記念信徒大会」をホストしたことであった。1000 人会堂と言われた東京山手教会に全国から馳せ参じた信徒 954 名の讃美と感謝が熱風のように満員の会堂を揺るがした。

その 2009 年は、「日本伝道 150 年記念初週連続祈禱会」によって始まり、翌年 3 月「信仰生活 50 年感謝礼拝・聖餐式」で行事を結ぶ丸一年に亘るプロジェクト。「ありがとう 150 年、つなごう 200 年 主と共に」のキャッチフレーズと「感謝と奮起」の合言葉が躍りに躍った。大会イメージソング「いつまでもつづく教会」を教会学校の生徒たちと一緒に歌った。振り返れば、すべてご恩寵に満ちあふれたものであった。

2015 年 7 月、全国信徒会再結成記念大会の反省評価会、同年秋の相談会で、宗教改革 500 年の意義をどう理解するか、勉強会など協議を進めていた。東京

「宗教改革500周年記念 教会中高生・青年大会」 開催に向けて

宗教改革 500 周年記念教会中高生・青年大会実行委員長／青山教会牧師

増田 将平

この度、宗教改革 500 周年記念事業準備委員会の下、教育委員会、伝道委員会、伝道推進室、学生キリスト教友愛会（SCF）が協力して「宗教改革 500 周年記念教会中高生・青年大会」を実施いたします。概要は右上の通りです。

＊

2014 年には教会中高生・青年大会が御殿場の東山荘で開催され総勢 370 名が参加しました。参加した若者たちは、全国各地の信仰の友と出会う喜びで満たされ、主イエス・キリストの招きに応じて立ち上がり、ある者は洗礼へと導かれ、ある者は伝道献身者の道を歩み始めました。大会の開催を知り、半世紀前に開催された教団青年大会に参加した方々からは「大会に参加した時の喜びは 50 年経った今でも忘れられない」という感想を聞きました。中高生大会では普段顔を合わせることもない同世代の多くの仲間たちと寝食を共にし、主を賛美し、心を開いて語り合います。参加した中高生にとって 2017 年の夏の軽井沢は生涯忘れたがたい宝となることでしょう。

＊

日本基督教団は 2017 年の「宗教改革 500 周年」を、福音伝道を推進する契機之年として記念し、プロテスタント諸教会・諸教派のみならず、カトリック教会をも含む広い教会一致運動（エキュメニズム）の祈りと交わりの中で、福音伝道の働きをより一層大胆に進めていくことになりました。このことを受け、青年大会では超教派の諸教会の青年たちにも参加を呼びかけ、主にあって一つとされていることを共に喜び祝う礼拝を捧げたいと願っています。機会を与えられ NCC 常議員会で青年大会のアピールをさせていただきました。また実行委員会に大嶋重徳 K G K（キリスト者学生会）総主事をお迎えして学びと意見交換の時を持ちました。更に福音派の神学校である東京基督教大学の山口陽一先生を訪問し、青年大会について説明し今後の伝道協力の可能性について話し合いの時を持ちました。山口先生は私どもを歓迎してくださり、教員、

▲ 主 題

「聖書の福音に立って共に進もう」

教会中高生大会

▲ 日 時 2017 年 8 月 9 日（水）～ 11 日（金）

▲ 場 所 恵みシャレー軽井沢

教会青年大会

▲ 日 時 2018 年 3 月 21 日（祝）

▲ 場 所 青山学院大学ガウチャーホール

学生の皆さんに紹介していただきました。お会いした先生方は教団が超教派の大会を開催することを聞いて喜び、私どもを励ましていただきました。青年大会が教団のみならず、教派を超えた日本伝道のきっかけとなればと心から願っております。

＊

ぜひ皆様の教会から中高生、青年を今大会にお送りください。今回も参加者への交通費補助をしたいと考えています。大会は献金によって運営されます。献金につきましては、後日、ご案内をいたしますので、ご協力をよろしくお願いします。

日本各地の主にある兄弟姉妹の皆様は心より祝福を祈ります。

＊大会実行委員は以下の通りです。

飯田敏勝（伝道委員）、小林克哉（伝道推進室）、野口幸生（教育委員）、野田 沢（SCF 主事）、増田将平（実行委員長）



東京基督教大学の
山口陽一先生（中央左）と



青年大会をアピールする増田牧師

KGK 大嶋重徳総主事（中央左下）をお迎えして

宗教改革 500 周年記念事業

ユースミッション 2017

日独

参加者募集 予告

「あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです」
(ローマの信徒への手紙 1 章 12 節)

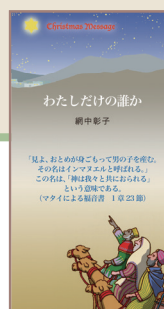
ベルリンの壁の崩壊後、全国教会婦人会連合とベルリン・ブランデンブルグ領邦福音主義教会ヴィットシュトック・ルピン教区との関係が確立し、日独双方の婦人と若者たちはこの関係を長年大切にしてきました。近年は教団の伝道推進室はじめ教育委員会、世界宣教委員会の協力の下、教団主催で「日独ユースミッション」として交流が重ねられています。2014 年には御殿場での「青年・中高生大会」に、2015 年は「ユースミッション 2015」としてドイツ・チームを日本にお迎えしました。この教会青年の関係が、今後も続けられることを願い、2017 年 7 月に、「第 8 回日独ユースミッション」として、ルターによる宗教改革 500 年を祝うヴィッテンベルグでの国際ユース・キャンプと一緒に参加することをメインプログラムとして、先方から教団ユース・チームの訪独を招待されています。

募集内容 (案)

- ◆ 日程 2017 年 7 月 25 日 (火)～8 月 6 日 (日)
- ◆ 参加者 12 歳以上～大学生 (原則)
- ◆ 人数 15 名以内
- ◆ 備考 教会員および求道者
牧師の推薦状要
準備会および報告会参加要
- ◆ 参加費 往復航空運賃 (一部教団補助予定)

宗教改革 500 周年記念事業準備委員会書記
杉森 耀子

伝道トラクトをご活用ください



Christmas Message

わたしだけの誰か

網中彰子牧師



死よりも
確かなものは何か

近藤勝彦牧師



教会は誰のもの?
あなただけのもの!

山北宣久牧師



すべてのわざには
時がある

姜尚中氏

教団ホームページ (伝道推進室のページ) で、内容をお読みになれます。

問い合わせ・お申し込みは

Tel 03-3202-0541 Fax 03-3207-3918
E-mail dendo-s@uccj.org

教会名等の刷込 なし… 1 枚 10 円、刷込 あり… 1 枚 12 円
(山北宣久トラクトは刷込の有無にかかわらず 1 枚 15 円)
教団ホームページから購入申込書をダウンロードできます。

クリスマス献金のお願い

御子のご降誕は私たちの救いのためでした。御子によりもたらされた救いを宣べ伝えるため、教団・諸教会が一層用いられるよう願ってやみません。皆様の伝道に対する篤いお思いと献金に支えられ、伝道推進室の働きが許されております。改めてクリスマス献金のお願いを申し上げます (年間献金目標 600 万円)。日本伝道の召しにお応えしていくため、伝道推進室の働きを覚え、お祈りお支えください。

《郵便振替口座》

00150-4-338628 日本基督教団伝道推進室



編集後記

- ★アドベントからクリスマスへの歩みに福音の恵みが満ち溢れますよう、お祈りいたします。
- ★室報第 8 号をとおして、主が伝道推進室の交わりをとおして与えて下さった豊かな恵みを、分かちあいたい、祈っております。なお、雑誌「信徒の友」に伝道推進室のコラムが連載されています。そちらも是非ご覧ください、共に日本伝道の祈りを一つに集めましょう。
- ★伝道トラクトも是非ご利用ください。
(広報実務委員会)



《伝道推進室基本方針》

日本基督教団は、聖なる公同の教会に連なる福音主義合同教会である。本教団は、簡易信条と公会主義の伝統を継承しつつ、十字架と復活の主のご委託に応じて、日本伝道の幻に仕える。伝道推進室は、伝道委員会のもとに設置された機関であり、『日本基督教団信仰告白』と『日本基督教団教憲教規』に基づく信仰の一致をもって、さらには将来の『伝道局』構想を視野に入れつつ、教団全体における伝道の実践と研究に取り組み、教団内諸教会、諸団体における伝道の推進に仕えるために活動する。

● 発行者 / 石橋秀雄 ● 発行日 / 2016 年 11 月 27 日

伝道推進室報 No.8

● 発行所 / 日本基督教団 伝道推進室

《日本基督教団事務局内》

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 2-3-18-31 (郵便振替 00150-4-338628)

TEL 03-3202-0541 FAX 03-3207-3918 URL <http://uccj.org>